



# 幼児期における性差と

## その指導

生 沢 雅 夫

はじめに、事実の問題と価値の問題とを区別しておきたい。教育とか指導とかいうことは、一方では指導されるものの実態を、先入観や偏見なしに客観的にとらえるという側面と、他方では指導の方向がいくつありうるるとき、その中のどれがもっとも望ましい方向であるかをきめる価値の問題とを含んでいるからである。

この小論では、前半で幼児における性差についての実態をながめ、後半で性差のあつかいにかたについてのあるべき姿を考えてみたい。

### 性 差 の 事 実

生まれたときから（性染色体による性決定を考えれば受精したときから）人間が男と女とに分れているということは、厳とした事実であるが、この性別にともなって、さまざまな他の性質にもまたちがいがみとめられるであろうか。幼児期は男女の性質が分化する以前の中性的な時代であると考えられやすい。もちろん、この時代は

男女に共通点の多い時期であり、人間の生涯からみれば、幼児期として一括されるのにふさわしい時期ではあるが、よくしらべると、かなりの性差がみとめられる。

以下に、従来の研究で見出されている性差を、幼児期を中心にしてのべよう。

(一) 生育力 男と女の個体数の割合を性比とよんでいるが、受精時の性比は女一〇〇に対し男一五〇以上と推定されている。胎児の死亡は流産・死産としてあらわれるが、流産死における性比は、妊娠月数による差はあるが、女一〇〇に対し男一一〇—一三〇である。より多くの男が出生前に死亡してしまう（この傾向は人間以外の生物でも同様である）。出生時の性比は、諸民族、諸時代を通じてかなり一定しており、女一〇〇に対し男一〇五前後である。乳幼児死亡についていえば、生後の月数によってちがうが、女一〇〇に対し男一一〇—一五〇。乳児期以後のどの年齢においても、死亡者は男の方が多く、かつその性比は生存者の性比より大きい（男女の生

存者が平等に死ぬのではなく、男の方が相対的に多く死ぬ<sup>(1)(2)(3)</sup>。

この事實は、日常経験としては、男の子の方が育てにくいとか、女性の方が平均寿命が長いという知識として体験されている。こういう点では、男は胎児期から生涯を通じて、死に易い弱い生物である。

(二) ホメオスタシス 生理学的に生命現象をながめると、生活体はその内部環境(体温や血液中の諸物質などの状態)を一定の安定状態に保持する自動調節機構をもっている。この安定状態は生命が持続する限り、動揺はあるが一定の中の中に保持されなければならぬ。平衡がやぶれて回復できぬときが死である。動揺の中の性差に着目すると、男が小さく女が大きい。日常経験としては、女の方が顔色が変わりやすいなどの形で体験されている<sup>(4)</sup>。ところで、幼児でなく学童であるが、短時間のストレスを与えてある種のハランスのこわれた状態を作り、その回復過程をさまざまな生理学的測定を行なってしらべたところ、女兒の方が反応が強くあらわれるが回復は速やかであった<sup>(5)</sup>。女兒の方が弾力性のある生命維持機構をもっているといえるであろう。

(三) 身体特徴 身長、体重をはじめとして、身体各部の大きさや重さについて性差がある。胎児期のはじめは女の方が大きく、途中で男がおいこし、出生時には男が大きく、思春期までその差はひらいてゆく<sup>(6)(7)</sup>。筋肉の大きさや、肺活量、体重あたり肺活量も男が大である。男児がより活潑で活動的であるということの身体的

裏付けがここにあるといえよう。

(四) 発育速度 成熟の状態あるいは発育の極限に達する年令は、がいて女が早く、したがって、成熟に至る道程を女兒は早く歩むことになる。同年令の男女を比較するとき、見かけの大きさは男が大きくても、成熟に近づいている程度は女の方が大きいということがおこるのである。身体発育のもっとも安定した日印とされている手掌骨の発育経過は、明らかに女兒の方が年令的に先行する。また、乳歯の生えかたは男の方がやや早い、永久歯は女の方が早く生えてくることは、日常経験としても体験されよう<sup>(1)(2)(3)(4)(6)</sup>。

(五) 作業能 いわゆる能力的なものであるが、乳幼児期においては運動能力や言語能力などが中心になる。大きな身体運動の成績は男児がすぐれ、こまかな手先の作業は女兒がすぐれている。言語能力は、乳児期からおとに至るまで、女性がすぐれている。そのほか各種の作業成績まで考慮すれば、能力面に関しては、男女のどちらがすぐれているかといった差はひとめがたい<sup>(1)(3)(6)</sup>。

(六) 性格や興味 男女の行動の型ということで考えると、好まれる遊戯活動についての調査は**いぶん多い**。幼児期は男女に共通して好まれる遊戯活動も多いが、反面、明らかに男女の差も見出しうる。男児は身体運動をともなう活潑な遊戯をよりこのむのに対し、女兒はより静的な人形あそびなどをこのむ<sup>(1)(3)(6)</sup>。

ここで、筆者が、最近行なった興味の調査についてふれておきた**い**。小学一・三・五年の学童に対し、さまざまなあそびや活動に

対するすききらいをしらべ、潜在構造分析という統計的手法で分析したのである。潜在構造分析というのは、何人かの被検者の集団を、表面的な特徴で見かけ上の類型（現象類型）に分類するかわりに、潜在的な特徴で原型（発生型または潜在類型）に分類することをねらいにする。たとえば、一年生に潜在している真の分類原理はどのようなものかということを見出そうというわけである。

右の研究の結果、一年生は二つの潜在類型に分れていること、一方は男性的興味を示すグループ、もう一つは女性的興味を示すグループであることがわかった。好む行動や遊戯に着目して一年生を分類したら、性差を検出することが目的ではなかったのに、結果としては他の性格類型よりもまず、男性的と女性的という分類があらわれてきたわけで、男女のちがいの深刻なことに感銘をうけたことを、附記しておきたい。

以上を要約すれば、特に幼児期を中心にした性差は

- (イ) 男は女より生涯のあらゆる年齢水準において死にやすい。
- (ロ) 男は生理的平衡のみたれに対し、抵抗的であるのにくらべ、女はより柔軟で弾力的に反応している。

(ハ) 男児は身体や筋肉が大きく、外界への働きかけ（エネルギー放出）に適している

(ニ) 運動や言語を包括した能力に関しては差がない。

(ホ) 興味は共通の部分も多いが、はっきりと、男性的な型と女性的な型とに二分できる。

ということになる。

ここで注意すべきことの第一点は、見出された性差が、先天的な原因にもつくものか、後天的な社会的文化的影響によるものは、きめられないということである。現在の文化の中で見出される性差は、すべて社会的文化的な影響の下に作り出されたものだという証拠資料は、ミートの研究をはじめ多数に存在するが(ロ)(イ)、しかしこれとて先天的影響が皆無だという証拠にはならない。筆者のみるところでは、先天論と後天論のいずれが正しいかという形でも、何ほどの程度に先天的であるかまた後天的であるかという形で、相対的な影響力をしらべる方が大切で、このような知識が教育上指導上役に立つのだろうと思う。

いずれにせよ、前述の性差は、先天的な原因と後天的な原因とのからみあった結果であることを忘れてはならぬ。

注意の第二点は、性差とは、多くの共通点を前提にしているという点である。いずれも人間であり、共通の機構で生活し活動しているわけで、その共通点は甚だ大きいのであるが、なおかつ性差もあるという意味であることを忘れてはならぬ。

注意の第三点は、性差は男児全般対女児全般の差であって、特定個人をとりあげてみれば、男の中でもハラツキがあり女の中にもハラツキがあるということである。男児なら必ずある性質をもち、女児なら必ず別のある性質をもつというわけではなく、重複が存在しており、ここでいう性差とは、全般的な傾向のちがいをさすの

である。

## 性 差 観

（ここでできるだけ前述の事実を生かして、筆者の性差観（特に幼児における）をのべたい。ところで性差の事実をどちらの方へ指導するべきかという方針は、事実の中から生まれてくるのではない。

事実を正確にとらえるにつれて、事実の誤認にもとづいた偏見や理念を修正することができるといったことはあろうが、最終的には性差の教育的取り扱いが教育者の主観を交えたものになる。

さて、性差の教育論は、男性観女性観が関係し、いまはやりの家庭論にまでつながる可能性があり、ここで男女平等論が思い出される。

男女平等論は、こまかく考えれば実は一通りのものでなく、何通りもの異なった平等論があるように思われるが、筆者は、男女が全く同じものになるのがのぞましいといういわば中性化推進論はとらない。能力の平等はある種の実事であり、能力の平等化には賛成であるが、男女の性格や興味の特質をさらに尊重したいと考えるのである。

人間は生命活動をいとなんでいる。それは物質の状態よりも一段階高い水準で、一定の安定状態を保持している系である。この平衡を維持するのがホメオスタシスの機能なのであった。ところで生活体はそのすべてをホメオスタシスにささげているわけではない。む

しろエネルギーの浪費をしてホメオスタシスに相反するような行動も多い。例えば手足を動かすことは一時的には内的平衡を破壊するのである。人間の生活活動は、一方でホメオスタシスの実現という面をもつが、一方ではむしろホメオスタシスにささえられてはいるがホメオスタシスには直接には役に立たぬエネルギー放出という面をもっている。こどもが遊ぶのは何故かという問いは難問で、答は何通りも出されているが結着がつかぬ。しかしやはりそれは、エネルギー放出の（しかも生命の維持には直接寄与しない）形態の一つだと考えたい。哲学的にいえば、生活体ことに人間は、一方ではある水準に生命の平衡を維持しつつ、他方では平衡維持に役立たぬむしろそれを破壊するような形でエネルギー放出を行なっているであって、互いに矛盾した機能を果しているものともいえる。文化や文明とは、主として、生命維持と直結しない活動の産物であるといえないだろうか。

ここで問題になるのは、エネルギー放出の方向である。筆者はそれは何かを作り出すためにあてるのが望ましいと思う。今までになかったもの、今までとはちがうものを作り出すことが人間の活動のあるべき姿だと考える。個人は自己の平衡維持のほかに、何かを作り出す活動をなすべきだということを中心におけば、教育とは個人が物を作り出す可能性を最大限にひろげることが目的であり、その助力をなすものだということになる。言語や文字の習得、論理思考の学習などもこの意味で重要であり、生活指導もこの線に沿って行

なわるべきである。

ここで幼児の性差の問題にたちかえる。能力の性差はないが、身体的生理的特徴として、男は、よりエネルギーの外界への放出、外界への働きかけに適しており、女は生命活動の維持の面に強靱さをもっていると思える。もちろん個人ごとのバラツキはあるが、がいして右の傾向があるとすれば、これを一様に中性化した同一の活動形態に変革することには賛成できぬ。むしろある種の分化こそがのぞましいのではなからうか。生物の進化は性の未分化から分化へと進んだことを思えば、分化こそ自然の法則でもある。そしてまた調和というものも、同様なものとの混在よりは、異質なものとの交渉を含んだ体系の方が、よりのぞましいといえるであろう。

### 性差の指導

今までの議論は、主として個体の生命活動の面からなされた。しかし現実の教育場面では、男と女の相互交渉があるわけで、これも無視できない。

個体の可能性を最大にひきのばすということは、ある種の文化を促進することであった。男児はその活潑な活動を奨励し、とくに外界や物体への働きかけを行なわせたい。しかし副次的には、そのために自己の生命平衡維持をそこない、けがや死亡に至ることのないよう、危険防止と安全教育を徹底せねばなるまい。女児は外部からの刺激の侵襲への体制を練磨するため、さまざまな体験特に自然と

の接触を豊富にしたい。もちろん男女児とも知的面の教育は平等に行なうこと言うまでもない。

次に、男女児の相互交渉についていえば、大いに交渉して相互の共通点と差異点の理解をすすめたい。ただし、男児が身体・体力の比較観から女児に攻撃を加えることもあると思われるが、对人的な働きかけと、対人攻撃は別であること、エネルギーは人をいじめるために用いるべきでないことなどを説かねばなるまい。

このような考え方は、筆者の性差観を反映した、素材で一般的なものであるから、これの現実への適用については、まだまだ工夫せねばならぬことが多いと思う。男の子らしい男の子、女の子らしい女の子とは具体的には何をさすのかということが、改めて問われねばならぬであろう。(大阪市立大学)

### 文献

- (1) Anastasi, A. *Differential psychology: individual and group differences in behavior*. 3rd ed., 1958, Macmillan, (特) chap. 14, 452—504.
- (2) Sontag, L. W. *Physiological factors and Personality in children. child-development*, 1947, 18, 185—189.
- (3) Terman, L. M. and Tyler, L. E. *psychological sex differences*. in Carmichael, L. (Ed.) *Manual of child psychology*. 2nd ed., 1954, Wiley, 1064—1114.
- (4) Thompson, H. *Physical growth*. in Carmichael L. (Ed.) *Manual of child psychology*. 2nd ed., 1954, Wiley, 292—334.
- (5) 生沢雅夫、学童の興味の潜在構造分析、性差と発達差、日心学会第二七回大会発表論文集、昭三八(印刷中)。
- (6) 三好 稔、差異心理学—個人差の心理学—、昭二六、金子(特)二三三—二九〇頁。
- (7) 館 稔、人口の生物学、南亮三郎(編)人口大事典、昭三二、平凡社、五六三—六三二頁。